

### 対誘導トレーニングによる子どもの被誘導性の減少

越智, 啓太 / NAGAYAMA, Keiichi / OCHI, Keita / 長山, 恵一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

58

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

96

(発行年 / Year)

2009-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004448>

# 耐誘導トレーニングによる子どもの被誘導性の減少

越智 啓太・長尾 恵

## 要 旨

虐待を受けた子どもや事件を目撃した子どもから供述を聴取する場合、子どもの被誘導性が大きな問題になる。そこで、本研究ではあらかじめ、子どもに対してトレーニングを行うことによって、被誘導性を減らすことができないかについて検討した。子どもに短い物語を聞かせ、その内容について誘導的な質問5問を含む10問の質問を行った。質問に先立ってわざと誘導質問にひっかけてそれを訂正する方法（1問の質問を用いる場合と4問の質問を用いる場合）、質問に先立って聞いた物語についての絵を描かせる方法について調べた結果、4問の誘導質問にあらかじめひっかけて訂正する方法と絵を描かせる方法が子どもの被誘導性を減少させる効果があることがわかった。

## 問 題

### 子どもの証言の問題

子どもが事件の被害者や目撃者になることはめずらしいことではない。子どもに対する虐待事件や性犯罪は毎日のように発生しており、また、殺人や傷害、ひき逃げ事件の現場に子どもが居合わせてしまうこともある。このような場合、子どもの証言は事件捜査の重要な手がかりとなってくる。しかし、子どもから正確に証言を聴取するのは、実はなかなか難しい。子どもは、大人の質問に対して容易に同調してしまったり、影響を受けてしまいやすいからである（これを被誘導性という）。そこで、子どもを誘導せずに、正確な証言を聴取するためにはどのようにすれば良いのかについて研究していく必要がある。

この問題について、さかんに行われているのは、どのような形式で質問すれば子どもを誘導せずに

正確な証言がとれるかという研究である。たとえば、「犯人は眼鏡をかけていましたか？」などのイエス・ノー型、あるいは「犯人の車は白色だった、黒だった、それとも赤色だった？」などの多肢選択型のクローズな質問形式は、子どもを誘導してしまう危険性が大きく、「そこで何があったの」といったオープンな質問形式は、誘導の危険性が少ないことなどが示されている（Goodman & Reed, 1986, 越智, 1999）。

### 子どもの側への耐誘導トレーニング手法の研究

さて、子どもに質問する側が、子どもを誘導しないような聞き方を工夫するというのは、確かに有効な被誘導性対策である。しかし、この方法に問題点がないわけではない。オープンな質問形式は、子どもにとってはクローズな質問形式よりも答えにくいものであり、また、質問する側も子どもからオープンな質問だけで十分な回答を得るた

本研究の実施にあたっては、平成16～18年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C 課題番号16530460「虐待の疑いのある子どもに対する面接技法の開発」研究代表者越智啓太）の助成を得た。

めには辛抱強さと長い時間が必要な場合も多い。さらに、この種のインタビューを行うにはある程度の熟練を要するが、実際問題として、警察官などにこの種のインタビュー手法をトレーニングする時間も十分にあるとは限らない。

そこで、質問する側でなく、質問を受ける子どもの側に対しても、何らかの働きかけをすることによって誘導を防ぐことができないのかという考えが生まれてきた。つまり、仮に質問する側が、誘導的な質問をしてしまっても、子どもの側が、それに「ひっかからない」ようにさせることはできないのかというアプローチである。

まず、Moston (1987) は、子どもに「(質問の意味や答えが) わからなかったら、わからないというように」と教示することの効果について検討している。彼は、6歳から10歳の子ども72名に対して、さくらを使った簡単な出来事を目撃させ、その後、16問の質問を行った。この質問のうち8問は、実際には存在しなかった出来事についての質問(これを誤誘導質問とよぶ)になっている。例えば、実際にはさくらがつけていなかったネクタイの色についての質問に何らかの答えをしてしまった場合、誘導されたということになる。「ネクタイは見なかった」、「わからない」と答えれば誘導されなかったということである。この実験の結果、このような教示を行った場合には、誤誘導質問に対して、「わからない」と反応する頻度が高くなったことがわかった。ところが、この教示を受けた実験参加者は、実際には誘導質問でない質問についても「わからない」反応を頻発するようになり、全体としての正答率が上がるわけではなかった。つまり、「わかりません」を多用するようになったに過ぎなかった。

Warren, Hulse-Trotter, & Tubbs (1991) は、質問を行う前に、「質問の中には、相手をひっかけるといったトリックの質問が含まれているので、あくまで自分の記憶に従って回答するように」と教示することの効果について、7歳、12歳、成人の実験参加者合計109名を用いて検討している。この研究では、女性が避暑地で財布を盗まれるとい

う内容の短いストーリーを読んで聞かせ、そのあとに全20問の質問を行った。この中には、15問の誤誘導質問が含まれていた。これらの質問にどの程度、実験参加者がひっかかるかについて測定された。その結果、統制群に比べ、上記の教示を受けた場合、誘導にひっかかる率が低下することが示された。ただし、この効果は比較的小さなものに過ぎなかった。

Saywitz & Moan-Hardie (1994) は、より洗練されたトレーニングを行い、子どもに耐誘導性をつけることを試みた。彼らは、まず、子どもたちに、主人公が誤誘導質問に惑わされて結局損をしてしまうというストーリーを提示し、その後、主人公が誤誘導質問に引っかからなかった場合どうなったか、ひっかかったのはなぜか等についての議論を行わせた。これは、誤誘導質問とはどのようなものなのかを子どもに理解させるためのものである。その後、子どもたちに、質問があったときはそれが誤誘導質問であるか否かに注意を払うこと、もし、誤誘導質問ならば、回答前によく出来事を想起すること、そして、もし十分な想起ができなければ、「わからない」ということについて教えた。その後、子どもたちにはビデオが見せられ、そのビデオについて、誤誘導質問を行い、トレーニングが十分に理解されているかチェックした。このトレーニングを受けた2週間後に、教室で起きた出来事についての質問試行が行われた。55人の子どもが誤誘導質問18問を含む56問の質問に答えた。その結果、統制群では、53%が誤誘導質問に引っかかってしまったのに対して、トレーニングを受けていた群では、39%しか引っかからなかった。また、「わかりません」の量も、統制群の5%に比べ、実験群は15%であった。

Gee, Gregory, & Pipe (1999) は、次のような方法で、子どもたちをトレーニングした。まず彼らは、インタビュアーが質問をする中には、彼らが知らなかったり、答えられなかったりする質問が含まれているが、このような質問には、適当に答えたり、推測で答えることをインタビュアーは望んでいないということを教える。その後、子ど

もが実際には知らないであろう、あるいは答えられないであろういくつかの質問を行い、その質問について、「わからない」という回答を行わせる。具体的には、ここで、「私（インタビュアー）の乗っている車の車種は？」といった質問が行われる。もし、この質問に子どもが答えてしまったら、推測で答えてはだめだよ、といってもう一度質問を繰り返す。もし、「わからない」と答えられたら、インタビュアーは子どもをほめる。

実験参加者は、9歳から13歳の子ども106名で彼らは、科学センターを訪問したときの出来事について、誤誘導質問を含む質問に回答させられた。その結果、トレーニングを受けた群は受けていない群に比べて、誤誘導質問に対しての「わからない」反応が増加した。ただし、この実験の問題点は、正答数も減少してしまった点である。これは、Mostonが、「わからない」回答の促進教示で引き起こしたことと同じであった。そこで、彼らは、「わからない」回答の質問のみでなく、誤誘導でないオープン質問「私の髪の色は何色？」、誤誘導でない強制選択質問「あなたはブーツを履いている、靴を履いている？」、「わからない」質問「私のミドルネームは、バーバラかジェーンのどっち？」、誤っている質問「ペットの恐竜の色は何色？」などを導入し、それぞれのタイプの質問に正しく答えられた場合には、ほめるという試行を導入したところ、正答数を減少させずに、「わからない」反応が増加させることに成功した。

### 本研究で検討する耐誘導トレーニング

これらの研究の中では、Saywitz & Moan-Hardie (1991) や Gee ら (1999) の研究が良い成績を示している。しかし、これらの研究は、トレーニングに時間がかかり、そのため犯罪捜査などの場面で実用的に使用するのは難しいという欠点も持っている。Warren ら (1991) の研究は、比較的単純な教示が用いられているが、おそらく教示があまりにも簡単すぎたため、十分な効果が得られなかったと思われる。そこで、本研究では、Warren の教示のレベルから、Gee の教示のレベ

ルに相当する3種類の条件を設定し、どのようなトレーニングを行えば、どの程度、子どもの被誘導性を減少させることができるのかについて、検討してみようと思う。

本実験で用いる3つの条件のうち、最初の2つの条件は、わざと子どもに誘導的な質問を行い、それにひっかからせ、そのあとで、誤りを訂正させるという簡単な試行を行うことで、子どもの被誘導性を減少させようとするものである。Saywitz らの研究や Gee らの研究における耐誘導トレーニングはこの原理に基づいているものである。子どもが誤誘導質問に引っかかる原因として考えられるのは、「大人のいうことは真実で誤ったことはいわない」、「大人は正しい答えをすでに知っている」、「大人の要求に沿った解答が重要である」などの信念があるためだと考えられている (Aldridge & Wood, 1998)。そのため、わざと引っかけ問題を出すことによって、「大人でも間違った質問をすることがある」ことを教えるとともに、それを指摘してもいいこと、それに誘導されなくて自分の見解で否定できることを認識してもらい、実際に、誘導にひっかからない解答をする練習をするためである。第1の条件では1問の耐誘導試行を、第2の条件では4問の耐誘導試行を行うことにした。

次に第3の条件であるが、この条件では、質問に先立って質問の対象となる出来事についての描画を行わせることによって、耐誘導性を増加させることができるかという方法を試してみることにした。子どもの被誘導性が高い理由としては記憶表象の問題があると指摘されている (Ackil & Zaragoza, 1995)。記憶表象自体が弱かったり、質問時に記憶表象に適切にアクセスできなかったり、しなかったりするということである。もし、そうだとすれば、質問に先立って、出来事の記憶表象にアクセスさせておくことが、被誘導性を減少させるためには、有効であるかもしれない。子どもを実験参加者にしたものではないが、認知インタビューによって出来事をイメージ化して想起させると、誤誘導質問に対して耐性が生じることが指摘

されている (Geiselman, Fisher, Cohen, Holland & Surtes, 1986, 越智・増田, 2000)。子どもに出来事の記憶へ自然にアクセスさせる方法として考えられるのが、出来事についての絵を描かせるという方法である。この方法により、より多くの出来事を想起できるようになるということは Butler, Gross, & Hayne (1995) や越智・小坂 (2008) によって示されており、また、海外の刑事司法の現場では、「ドロー&テル (draw & tell)」方式のインタビューは子どもに対してしばしば行われている。そこで、質問に先立つ出来事ごとの描画が誘導に対する耐性を形成するのか否かについて検討することにした。

## 実 験

### 実験参加者

新潟県内の保育園に通う 4～5 歳児 138 名 (うち、4 歳児クラス 69 名, 5 歳児クラス 67 名) に対して実験を行い、回答が不能だった 2 名 (いずれも 5 歳児クラス) をのぞく 136 名を分析対象とした。平均月齢は 4 歳群でおおよそ 4 歳 6 ヶ月, 5 歳群で 5 歳 6 ヶ月であった。彼らを統制群 36 名, 1 問群 35 名, 4 問群 24 名, 描画群 41 名に振り分けた。

### 手続き

実験参加者は、20～30 人ごとの集団で紙芝居をみた。クラス担当の保育士から、「お話おねえさんが、みんなに紙芝居を見せにきてくれる」として紹介があった後、1 人の実験協力者の女性が登場した。簡単な自己紹介の後で、「お話の後にみんなから紙芝居の感想を聞かせてもらうから、よく見て、覚えていてね」と教示を行い、車座にすわった子どもの中心で紙芝居を読み聞かせた。紙芝居は、「こぎつねコンチのにわそうじ」(中川, 2002) という 5 分程度のものであった (内容は、こぎつねのコンチが、お母さんのお手伝いをして庭をほうきで掃いている途中、ほうきにまたがると、ほうきが宙に浮き、大空に舞い上がって、そこで楽し

い冒険をした後で再び庭に舞い戻るというもの)。紙芝居終了後に、実験参加者は一人ずつ別室に呼び出されテストが行われた。テストは、物語の内容に関するもので「はい-いいえ」で回答する形式の 10 問の質問であった。このうち、5 問は、呈示された刺激の内容に合致する質問であり、「はい」が正答になるものである (これを統制質問とする)。具体的には「こぎつねがほうきで集めたものの中に、きのこはありましたか」などの質問である。残りの 5 問は、誤誘導質問であり、実際には刺激の中に現れなかった事柄について質問するものであった。具体的には、こぎつねは、実際にはほうきから落ちていないにもかかわらず、「こぎつねは、ほうきから落ちて怖い思いをしましたね」などの質問である。この問題は、「はい」と答えた場合、質問の唱導する方向に答えてしまったことになり、誤りとなる。

実験参加者は 4 つの条件にランダムに分けられた。第 1 の条件は耐誘導試行 1 問群 (以下 1 問群と略記) である。この群では、質問に先立ち、まず、「これから質問をするんだけど、お姉さんは ○ ○ くん (ちゃん) をひっかけようとしてわざと意地悪な質問もだしちゃうよ。ひっかからないようによく考えて答えてね。もしわからなかったら、わからないっていてもいいんだよ」と教示した後で、「主人公のきつねの名前はコンタだったよね」という誤誘導質問を行った。この問題に関しては、4 歳児 87.5%, 5 歳児 100% が誤って「はい」と回答した。この問題に誤答した子どもに対しては、正しい答えを教え、「今度からはひっかからないようにね」と教示した。正答の子どもに対しては、「そうだよ、よくひっかからなかったね」と教示した。この後、10 問のテスト試行 (5 問が誤誘導質問, 5 問が非誘導質問) を実施した。

第 2 の条件は、耐誘導試行 4 問群 (以下 4 問群と略記) である。この群では、1 問群と同様な教示を行った後で、「○○くん (ちゃん) は女の子 (男の子) だっていったらそれは本当のことかな (実験者は実際とは反対の性別を言う)」、「今日の天気が晴れ (雨) だと思ったら、それは本当のこ

とかな（実際の天気と異なったことをいう）」、「今が夜だといったら、それは本当のことかな（実験時間帯は実際は昼間）」、「〇〇くん（ちゃん）は、いま小学生だといったら、それは本当のことかな（実際には保育園児である）」、という質問を行った。この質問はいずれも、「うん」などといって同意すれば誤りになるわけであり、誤誘導質問になっている。これらの質問に対して、誤った場合、実験1と同様に、正しい答えを教え、「今度からはひっかからないようにね」と教示した。正答の子どもに対しては、「そうだよ、よくひっかからなかったね」といった。すべての実験参加者が、4問目までで誤誘導質問にひっかからなくなった。この試行の後、10問のテスト試行を実施した。

第3の条件は、描画群である。この群では、紙芝居終了後、集団で描画課題が行われた。子どもたちには、15色のクレヨンと画用紙1枚を配布し、「さっき、見た紙芝居で思い出に残っている絵を描いてください」と教示した後、おおむね15分間で描画を行わせた。描画終了後、「これから質問をするんだけど、もしわからなかったら、わからないっていてもいいんだよ」とのみ教示を行い、引き続き第1、第2群と同様の10問のテスト試行を行った。質問に際しては、描画した絵画を持参

させ、それを参照することを許した。

最後に統制群を設定した。この群では、質問に先立って「これから質問をするんだけど、もしわからなかったら、わからないっていてもいいんだよ」とのみ教示が行われた。特別な耐誘導試行は行わなかった。

なお、子どもたちには、部屋の外に保育士がいることを事前に告げたが、不安を呈したり、実験者と1対1で面接できない子どもには、保育士が同席して実験を行った。その場合、保育士は子どもを抱く、椅子の横につく、子どもを励ます、などの行為を行ったが、テスト内容についての発言や誘導行為は禁止した。また、質問試行は3名の実験実施協力者（全員女性、20代前半）によって行われたが、質問者の効果がでないように、条件についてカウンターバランスを行った。

実験参加者の子どもたちの回答については、質問に対して肯定的な反応を「はい」反応、否定的な反応、あるいは質問の誤りを指摘する反応を「いいえ」反応、「知らない」、「わからない」、首をかしげるなどの反応を「わかりません」反応としてカテゴリー分けした。

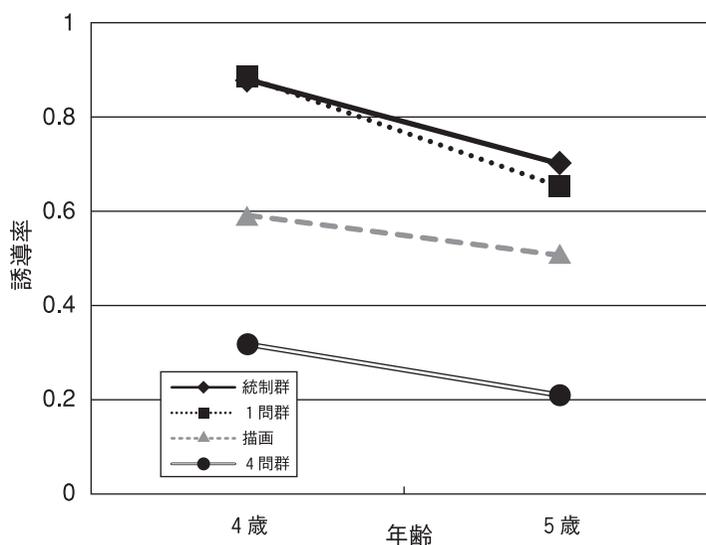


Figure.1 耐誘導トレーニングの種類による被誘導率の違い

Table.1 4歳児と5歳児の誘導数、正答数、「わかりません」反応数

	誘導数(5問中)		正答数(5問中)		「わかりません」数(10問中)	
	4歳	5歳	4歳	5歳	4歳	5歳
統制群	4.41(1.00)	3.47(1.31)	4.88(0.33)	4.42(0.61)	0.00(0)	0.32(0.67)
1問群	4.44(0.96)	3.26(1.48)	4.81(0.40)	4.42(0.90)	0.00(0)	0.00(0)
4問群	1.64(1.57)	1.08(0.86)	3.91(0.54)	4.08(0.86)	0.64(0.92)	0.38(0.65)
描画群	2.96(1.65)	2.56(2.10)	3.96(1.37)	4.44(1.03)	0.60(1.04)	0.38(1.02)

(注 括弧内は標準偏差)

Table.2 質問種類別の「わかりません」反応数

	誘導質問(5問中)		統制質問(5問中)	
	4歳	5歳	4歳	5歳
統制群	0.00(0)	0.05(0.23)	0.00(0)	0.26(0.56)
1問群	0.00(0)	0.00(0)	0.00(0)	0.00(0)
4問群	0.27(0.47)	0.23(0.44)	0.36(0.50)	0.15(0.50)
描画群	0.00(0)	0.00(0)	0.60(1.04)	0.36(1.02)

(注 括弧内は標準偏差)

## 結果

### 誤誘導質問に対する耐性の分析

結果の要約を Table.1, Figure.1 に示した。まず、それぞれの群について、5問の誤誘導質問に対して、何問誘導されてしまったかについて分析する。年齢(4歳児, 5歳児) × 条件(統制群, 1問群, 4問群, 描画群)の2元配置の分散分析を行ったところ、年齢の主効果 ( $F(1,128)=9.163$ ,  $MSe=18.989$ ,  $p<0.01$ )、条件の主効果 ( $F(3,128)=19.646$ ,  $MSe=40.648$ ,  $p<0.01$ ) が有意となった。年齢と条件の交互作用 ( $F(3,128)=0.530$ ,  $MSe=1.097$  ns) は、有意ではなかった。条件間の違いについて、ペアごとの比較を行ったところ、1問群と統制群に差はなかったが、それ以外のすべての組み合わせについて有意な差が存在した。

つぎに誤誘導質問に対して「わからない」といった数について集計した (Table.2)。誤誘導質問に対しては、「いいえ」反応が主に生じており、「わかりません」反応は、全体の1.37%でしか生じなかった。しかし、条件ごとの比率をしてみると、統制群0.56%、1問群0%、4問群5.00%、

描画群0%であった。そこで、この反応についても、同様に年齢(4歳児, 5歳児) × 条件(統制群, 1問群, 4問群, 描画群)の2元配置の分散分析を行った。その結果、条件の主効果 ( $F(1,128)=9.214$ ,  $MSe=0.391$ ,  $p<0.01$ ) が有意となり、年齢の主効果 ( $F(1,128)=0.005$ ,  $MSe=0.0002$ , ns)、交互作用 ( $F(1,128)=0.226$ ,  $MSe=0.0011$ , ns) は有意ではなかった。条件間の違いについてペアごとの比較を行った結果、4問群のみが他の3つの群に比べて有意に「わかりません」反応が多かった。

### 統制質問についての分析

つぎに、誤誘導質問でない、5問の統制質問に対する正答数について分析した。年齢(4歳児, 5歳児) × 条件(統制群, 1問群, 4問群, 描画群)の2元配置の分散分析を行ったところ、条件の主効果 ( $F(3,128)=4.096$ ,  $MSe=3.142$ ,  $p<0.01$ ) が有意となった。年齢の主効果 ( $F(1,128)=0.113$ ,  $MSe=0.0865$ , ns)、年齢と条件の交互作用 ( $F(3,128)=2.401$ ,  $MSe=1.842$  ns) に有意差はなかった。条件間の違いについて、ペアごとの比較を行ったところ、統制群と1問群の間、描画群と4

問群の間には有意な差がなかったが、それ以外のすべての条件間に有意な差が検出された。

統制質問に対する「わかりません」反応は総数で全体の4.70%生じていた。条件ごとの比率を見てみると、統制群2.78%、1問群0%、4問群5.00%、描画群10.24%であった。年齢(4歳児, 5歳児)×条件(統制群, 1問群, 4問群, 描画群)の2元配置の分散分析を行った。その結果、条件の主効果( $F(1,128)=3.806$ ,  $MSe=1.596$ ,  $p<0.05$ )が有意となり、年齢の主効果( $F(1,128)=0.141$ ,  $MSe=0.059$ , ns)、交互作用( $F(1,128)=1.068$ ,  $MSe=0.447$ , ns)は有意ではなかった。条件間の違いについてペアごとの比較を行った結果、描画群が統制群と1問群との間に有意な差が存在した。つまり、描画群で「わかりません」反応が多かった。

#### 「わかりません」という回答の総数についての分析

最後に、誤誘導質問、統制質問あわせて10問の質問について、「わかりません」という回答がなされた総数について分析した。わからない反応は、全体の2.86%で生じていた。年齢(4歳児, 5歳児)×条件(統制群, 1問群, 4問群, 描画群)の2元配置の分散分析を行ったところ、条件の主効果( $F(3,128)=4.17$ ,  $MSe=2.068$ ,  $p<0.01$ )が有意となった。年齢の主効果( $F(1,128)=0.105$ ,  $MSe=0.0521$ , ns)、年齢と条件の交互作用( $F(3,128)=1.172$ ,  $MSe=0.581$ , ns)に有意差はなかった。条件間の違いについて、ペアによる比較を行ったところ、描画群と統制群, 1問群, および4問群と1問群の間に有意な差が存在した。

## 考 察

### 耐誘導試行の効果

まず、年齢の効果であるが、耐誘導性は年齢と関連し、4歳群のほうが5歳群に比べて誘導的な質問に誤って回答してしまう率が高かった。誤誘導質問への耐性は年齢とともに上昇するというデータは多くの研究で報告されており(Bjorklund, et al., 2000)、本研究の結果はこれらの研究を確認

するものとなっている。

次に、耐誘導試行の効果であるが、1問群では効果がなかったが、4問群だと被誘導性を減少させた。描画群は、4問群と1問群の中間の効果を持っていた。

では、これらの訓練のどのような要素が耐誘導性を増加させたのか。まず、大きな差が生じた1問群と4問群について検討してみる。この結果より、1問の試行では、子どもにとって、誤誘導質問の概念やそれに対する答え方について明確にならないが、4問の試行を行うと、これらについて把握できるのではないかと考えられる。1問の試行だと、子どもは、まちがった回答を正されるだけで、誤誘導質問について自発的に正しく回答するという経験や、それによってほめられる(質問者側が強化する)という経験をしていない。このような経験をすることが耐誘導性を生じさせるためには必要なかも知れない。

ただし、本研究においては1問群と4問群には、試行数以外の違いも含まれていた。それは、試行の内容である。1問群では、質問内容が紙芝居に関するものであったが、4問群では、子どもの個人的な情報・現在の天気、時間に関するものであった。子どもにとっては、自分の身近な問題について耐誘導試行を行う方が、その質問の性質を理解しやすかった可能性がある。耐誘導試行の絶対的な数が重要なのか、内容が重要なのかについては、引き続き検討することが必要であろう。

次に描画群についてみてみる。この群でも、予想通り、被誘導性を減少させる効果があった。これは、当初想定されたように、質問に先立って原記憶に何らかの形でアクセスさせておくことが、耐誘導性を促進するのに有効であることを示している。質問がなされた場合、原記憶を検索せずに質問形式のみに反応して表面的な回答することが減るのであろう。しかし、描画群の耐誘導効果は4問群ほど大きくはなかった。インタビューに先立って、目撃した出来事を想起させるという試行は耐誘導効果はあるが、耐誘導性をつける場合には、誘導性に直接焦点を当てる方が効果が大きい

と思われる。

### 正答率と「わかりません」反応について

次に、正答率に関して見てみる。統制質問について分析してみたところ、4問群では、正答率が低下するという結果が見られた。これは、4問群で正答率が低下したというよりは、ほかの群で、実験参加者が質問に対して安易に「はい」という肯定的な返答をしてしまったからだと思われる。本実験の統制質問はいずれも「はい」が正答になるものなので、このような返答が行われると見かけ上、正答率が向上してしまう。4問群では、「わかりません」反応の増加が見られているが、これからこの群では、実験参加者がより慎重に解答したことがわかる。

「わかりません」反応の増加に関して興味深いのは、本実験では、直接的に「わかりません」を使用するようにと教示していないにもかかわらず「わかりません」反応が増加したという点である。「わかりません」を使用するように直接教示した Moston の実験では、結果的に「わかりません」反応が乱発されてしまい、有効な結果を出すことはできなかった。本実験のような手続きを使用すれば、「わかりません」乱発反応を引き起こすことなしに質問への回答を慎重にさせることができると思われる。

### 実際の現場での使用に関する問題

本実験の結果、子どもに対して耐誘導性をつけるためには実際のインタビューに先だって、4問の誤誘導質問を行ってトレーニングするのが、もっとも効果的であるということが示された。また、Saywitz の実験のような複雑なトレーニングを行わなくとも簡単な事前トレーニングで、子どもの被誘導性を減少させることができたことは実務への応用を考えた場合に、非常に有用な点である。また、今回用いた4問群のトレーニングでは、刺激の物語の内容に立ち入らないで、耐誘導性をつけることができたという意味では、虐待や性犯罪の捜査での利用可能性を持っていると思われる。

描画法も4問群と同じように耐誘導効果を持っていたので、有効性はあると思われる。ただし、この方法は事前に原記憶を想起させるという手続きをとるために、性犯罪や虐待事件における被害者からの聴取にはあまり向いていないだろう。これらの事件の場合には、被害者に何度も反復して事件の記憶を思い出させることは、心理的に悪影響を及ぼす可能性が大きいと思われるからである。

今後は、より現実に近い設定でのこの方法の有効性と限界について検討していくことが必要である。

### 文献

- Ackil, J. K., & Zaragoza, M. S. 1995 Developmental differences in eyewitness suggestibility and memory for source. *Journal of Experimental Child Psychology*, **60**, 57-83.
- Aldridge, M., & Wood, J. 1998 *Interviewing Children: A guide for child care and forensic practitioners*. John Wiley and Sons, Ltd.
- Bjorklund, D. F., Cassel, W. S., Bjorklund, B. R., Brown, R. D., Park, C. L., & Ernst, K., & Owen, F. A. 2000 Social demand characteristics in children's and adults' eyewitness memory and suggestibility: the effect of different interviewers on free recall and recognition. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 421-433.
- Butler, S, Gross, J., & Hayne, H. 1995 The effect of drawing on memory performance in young children. *Developmental Psychology*, **31**, 597-608.
- Gee, S., Gregory, M., & Pipe, M. 1999 'What colour is your pet dinosaur?' The impact of pre-interview training and question type on children's answers. *Legal and Criminological Psychology*, **4**, 111-128.
- Geiselman, R.E., Fisher, R.P., Cohen, G., Holland, H. and Surtes, L. 1986 Eyewitness responses to leading and misleading questions under the cognitive interview. *Journal of Police Science and Administration*, **14**, 31-39.
- Goodman, G.S. & Reed, R.S. 1986 Age differences in eyewitness testimony. *Law and Human Behavior*, **10**, 317-332.
- 越智啓太 1999 子どもの目撃者からの供述聴取における被誘導性とその対策 犯罪心理学研究, **37**, 29-

46. (Ochi, K. 1999 Reducing suggestibility in child eyewitness interview. *Japanese Journal of Criminal Psychology*, 37, 29-46.)
- 越智啓太・増田早哉子 2000 認知インタビューによる日常記憶の想起促進 認知科学会テクニカルレポート TR-37.
- 越智啓太・小坂香織 2008 描画による日常記憶の起促進 法政大学文学部紀要, 57, 83-90. (Ochi, K. & Kosaka, K. 2008 Drawing facilitates eyewitness's recollection of everyday events.)
- Moston, S. 1987 The suggestibility of children in interview studies. *First Language*, 7, 67-78.
- 中川李枝子 2002 こぎつねコンチのにわそうじ 童心社
- Saywitz, K. & Moan-Hardie, S. 1994 Reducing the potential for distortion of childhood memories. *Consciousness and Cognition*, 3, 257-293.
- Warren, A., Hulse-Trotter, K., & Tubbs, E. C. 1991 Inducing resistance to suggestibility in children. *Law and Human Behavior*, 15, 273-285.

## 《Summary》

## The effect of training for reduction of children's suggestibility

OCHI Keita and NAGAO Megumi

The aim of the present paper is to investigate what kind of interview is best for use with children victims of maltreatment for the purpose of obtaining accurate information from children. Children aged 4-5 years were presented with a short story and were asked ten questions concerning the story including five misleading and five not misleading questions. Before the procedure of questions, one fourth of the children were misled by one misleading question and were corrected (One-question condition), another fourth were misled by four questions and were corrected (Four-question condition), another fourth were asked to draw pictures of the story (Drawing condition), and the other fourth did not experience such procedures (Control condition). Comparing the results of the conditions, children in the four-question condition and the drawing condition were not misled significantly compared with control condition. In addition, children in the four-question condition were less misled than children in the drawing condition. Finally, on the basis of the results of the experiment, some issues were argued concerning the desirable methods of interviews to children victims of criminals.